

# 「教育原理」の授業方法について

長谷川 精 一

<はじめに>

「教育機関としての大学」、「教師としての大学人」という視点の必要性が近年ようやく声高に説かれるようになった。同時に大学における教育方法研究の重要性が語られる。しかし、具体的に「いかに教えるか」という点についての論稿はまだまだ少ない。確かにひとくちに大学といっても、規模や経営主体、立地条件、短期大学・四年制大学・大学院大学の別、学部・学科の種別など、様々に存在しており、授業の形態に関しても、講義・演習・実習など、多様なクラスが様々な規模で開講されている。この点は大学教育についての論議が一般的、抽象的なレベルにとどまり、日々の教育実践の質的向上に結びつきにくかった理由のひとつであろう。また、初等教育、中等教育においては、「何を教えるか」が比較的定まっており、「いかに教えるか」についての工夫に力が注がれてきたのに対し、高等教育においては、教えられる内容自体が知的権威をもつものとして、即ち、有難い「学問研究の成果」として考えられてきており、教え方そのものに十分な工夫がなされてこなかったことも事実であろう。「必要は発明の母」という。「大学の大衆化」が語られ、大学改革において教育機能の強化が課題とされる現在の状況の中で、大学での教授法研究の「必要」が主張されるようになったが、大学教育を受けてきた大学教員にしても、自らの学生時代を振り返ってみて、非常に興味深く、楽しく、わかりやすい授業というものが、果たして多くを占めていたであろうか。「必要」はもともとあったのであり、改善策を「発明」しなくても、これまでは何とかやってこれたにすぎない。もちろん、従来の授業の方法が全て問題があるということでは全くない。豊かな学識と学問への真摯な姿勢に裏づけされ、巧みな語り口で知的興味をかきたてられる講義に接する機会を筆者も得てきた。そういう講義をきくことができた幸運に感謝している。しかし、マックス・ウェーバーも述べるように、研究者としても教育者としても卓抜な人はごく少ない、ということは事実であろう<sup>(1)</sup>。ここで問題にしたいのは、むしろ多数を占めると思われる、「卓抜」を前提とできない普通の日常的な授業の場合についてである。

それでは、授業の改善の糸口はどこに見出すことができるのだろうか。言うまでもなく、

授業を構成するのは、受講者である学生と教員であるが、日々の授業に関して学生は何を思い、教員は何を考えているか、また、両者の望ましい関係とはいかなるものであるかという、ごく基本的なことから検討を始めるべきであろう。もとより、大学における授業方法の改善という大きなテーマに関して具体的な展開を求めるならば、まず守備範囲の限定が必要である。授業を担当する教員各個人の経験を持ち寄り、その蓄積の中から共有財産化すべきことがらが少しずつ見えてくるという道筋が必要であろう。本稿においては、教職課程科目「教育原理」の場合について、授業の方法について考察していきたい。

＜受講生にとって興味のもてない「教育原理」の授業とは＞

今回、「教育原理」の授業に関して、特にその方法を中心として、受講生に対するアンケートを行なった<sup>(2)</sup>。質問事項は以下の通りである。

[[「教育原理」の授業に関して、以下の質問にお答え下さい。

(1) あなたの受けた「教育原理」の授業は興味深いものでしたか？

次の中からお選び下さい。また、そう判断された理由は何ですか？

(全く興味深くなかった、あまり興味深くなかった、どちらともいえない、かなり興味深かった、とても興味深かった)

(2) あなたの受けた「教育原理」の授業は、どのような方法で行なわれましたか？

(3) 問(2)でお答えになった方法について、あなたの御意見をお聞かせ下さい。

(4) 「教育原理」の授業に関して、あなたの御意見、御感想を自由にお聞かせ下さい。]

アンケートの回答の中から、受講生によって「あまり興味深くなかった」、「全く興味深くなかった」と判断されたいくつかの授業に関して、受講生の意見をあげてみよう。

○専門的な用語の解説に終始したように感じられました。

○教科書の文字を追うだけの授業は、ほとんど頭を通り抜けるものだった。

○教科書中心。先生が大切なところを抜き出し、学生がノートをとる受身の授業。内容に興味はあっても、授業そのものには刺激がない。生徒自身が考える授業が望ましいと思う。

○ノートをとるだけの単純な授業ではなく、工夫した方がいいと思います。

○先生が一方的に話すので、よほどの興味深い内容でないと、テストの時だけの勉強になってしまうと思う。

○暗記勝負の、つめこむだけ頭につめこむ受験勉強、中学、高校とやってきた大嫌

いな勉強の反復のような講義だった。単位取得のためにひたすら覚えなければならぬことに憤りを覚える。

- 高校時代、大学は気難しそうな先生から、ずっと話を聞き、ノートをとるというイメージがあったけれど、それは事実でした。
- 大学に入るまでは、大学に入ったら、もう詰め込み教育なんか受けなくて、自分の好きな勉強を自分のペースでできると思っていました。でも、実際は、テスト前だけ一生懸命暗記していて、結局今も詰め込み教育の延長線上にいるんじゃないかという気がする。
- 『最近の生徒、学生達は自主性がない』とか言われているけど、それは、人の意見を受身的にただ聞かされていれば、仕方がない。本当はちゃんと一人一人考え方を持っているのに、それを発揮できる場がないから、受身にならざるを得ないのである。
- 知識の授業でした。一方的に先生から資料を与えられ、一方的に意見を与えられ、討議もしない。一人一人に『考える』という作業過程を与えないものでした。いわゆる一般論です。まちがったことは言っていないでしょう。でも、それだけなのです。
- 先生が言ったことをただノートに書いてテストにもその考えをあたかも自分の考えのように書くだけだった。
- 講義内容が抽象的でわかりにくく、まじめに聞こうと思っても、つい眠気に負けてしまう。
- 試験を終えた今、この科目が自分にとって何の意味があったのだろうと、空しい気分になります。
- 大教室での講義で私語が多く、先生はぼそぼそという感じで話されるので、マイクが使われていても聞えにくい。
- ピロピリした雰囲気での講義で、途中わかりにくいところを小声で隣の席の人に聞いたら、先生に、聞く気がないなら出ていけと厳しく注意された。

ここからは、受講生にとって望ましくない、面白くない授業のパターンが浮び上がってくる。その特徴は、次のようにまとめられるであろう。

- ◇もっぱら教員が話し、受講生はそれをノートにメモするという一方的な講義形式であること（教員のモノローグ）。
- ◇抽象的な専門用語の羅列とその解説
- ◇クラスの雰囲気は、教師のもつ強圧的、威圧的な態度が生む緊張型か、もしくは、学ぶ場としてのまとまりが成立していないアノミー型であること。
- ◇講義で話される内容が、受講生にとって、知的興味を呼び起こしたり、自己の成長に

結びついたりする意義深いものとなっていないこと。

さて、それでは、どのような授業が受講生にとって「興味深い」授業となるのだろうか。上にあげた「望ましくない」授業の対極を考えればよい。即ち、

◇教員から受講生への一方通行ではなく、和やかな雰囲気のもとで、両者が互いの反応に敏感に、対話的に創りあげていく相互通的なコミュニケーションのある授業（教員と受講生のダイアローグ）

◇具体的な話題、事例から包括的、普遍的な理論、理念へという流れ。

◇断片的な知識の伝達ではなく、活用できる身についた知識の獲得。思考過程の重視。

となろう。これらは教授理論において、何ら目新しいことがらではない。ただ、むしろ言い古された感もあるこれらのことがらが、大学における授業実践の中で充分自覚的にとらえられた例が少なかつただけである。次節以下では以上のことを念頭におきながら、具体的な授業方法の工夫について考えていきたい。

#### <「教育原理」の授業方法の工夫>

筆者が「教育原理」の授業を担当し始めて約5年になる。その間、非常勤講師および専任教員として、いくつかの大学で十数名から百名以上まで規模の異なるクラスを受けもってきた。当初は何冊かの「教育原理」のテキストも読み、講義形式で授業を行なったが、すぐにこれではいけないと感じ始めた。学生たちの表情が楽しそうに見えなかったからである。自分の学生時代を振りかえってもみた。ごく少数の知的興味をかきたてる講義を除いて、多くの講義は数回で見切りをつけて、もっぱら図書館へ通ったものだった。それは3年生になりゼミが始まるまで同じであった。筆者が経験してきた（特に大教室での）多くの講義も、筆者が行ない始めた授業も、前節で述べたモノローグ的な授業だったのである。そもそも講義に興味深いと感じるのは、聞く側がもともと、そのテーマに強い関心を抱いているか、講義そのものがそのテーマについて新たな関心を呼び起すような豊かな内容をもっており、巧みな話術によって聞き手を魅了しているか、どちらかの場合であろう。経験の乏しい筆者にできることは、何らかの方法上の工夫をすることだけであった。講義は一般に、あるテーマに関して、「問題提起」から「思考の展開」を経て「今後の展望」に至るまでを一人の教員が口述していく形をとる。受講生はそれを聞きながら追体験していくわけである。ゆえに、上記のアンケート結果にもあったように、よほどの魅力的な話し方と内容を兼ね備えていなければ、受講生にとっては「一方的」ととらえられやすい。受講生は「興味深くない」と判断すれば、出席せずに他人のノートや関係図書で何とか試験を乗りきろうとするか、出席の点数化やペナルティがあって欠席できなければ、私語や居眠りや「内職」をしつつ、「ムダ」と感じる時間をやり過ごそうとする、という悪循環が

続くのである。これを「受講態度が不まじめ」「熱意が感じられない」「免許状取得のためにがまんして講義にでている」<sup>(3)</sup>などと、受講生の側に責任を押し付けるのは簡単であるし、従来そのようにしてすませてきたばあいが多し。しかし、教員の側のそのような態度は、大学教育の空洞化をすすめるだけであろう。

それでは、どうすればよいのか。講義形式で一方向的に「教える」ことの対極にはどのような方法があるのか。できるだけ「教えよう」とせず、学生が主体的に「学びたい」と思うような方法はないだろうか。

いろいろ考えた結果、「問題提起」、「思考の展開」、「今後の展望」のうち、まず、毎回の授業においてテーマを絞って教員が「問題提起」を行ない、学生自らが自分なりに思考を「展開」し、「展望」は学生の意見を含めて教員からの示唆を提示するという形をとるのはどうだろうかと思いついた。「問題提起」の方法としては、プリントやビデオを用いることとした。配布されたプリントを読み、内容を把握することは講義を、ただ漠然と聴くよりも、より多くの集中力を必要とする。またビデオは、映像、音声の両方から、講義よりもはるかに豊かな情報を提供し得る。プリントは現実に起こっている具体的な教育問題について、関係図書及び新聞や雑誌の記事も材料として作成したオリジナルなものを用意し、ビデオは教育に関するテレビ番組や、登場人物のもつ教育観、人間観などを授業の素材とし得るような映画等を録画したものを準備した<sup>(4)</sup>。プリントを配布する前、あるいは、ビデオを見る前に、その日のテーマについて説明するが、これはできるだけ簡潔に、手短かにする。

次いで、プリントやビデオを通して考えたことをレポートにするように指示する。学生各自は自らの頭で思考を展開し、表現するのである。この際、書く量、文章のスタイルについては学生の自由にする。「書く」ということは、題材について自らの思考の展開を対象化し、明確化することを必要とする。さらに「書く」ことは、その題材をひとつの契機として、自らを世界に対して開いていくことでもある。人は「書く」過程で、自分はどのように感じ、どのように考える人間であるかに気づく。「書く」ことは世界と向き合い、自己と向き合うことなのである。「書く」ことは「考える」ことであり、この「考える」過程を授業の中に取り入れようとしたのである。

そして、学生のほとんどが書き終えたころをみはからって、レポートを集める。もちろん書くスピードには個人差があるので、まだ書き終えていない学生に対しては次週に提出することとする。最後にその日のテーマについて、さらに深く考えるためのヒントとなることから、あるいは、多くの学生が思考を展開すると予想される方向とは異なる視点、また、より包括的、総合的にそのテーマをとらえるための視座などについて、コメントする。この示唆もできるだけ簡潔に、ポイントを絞って話すようにする。上の各段階をどのような時間配分ですすめるかは、もとよりクラスの規模、クラスごとの個性によって異なるが、

初めはこのような慣れない授業方法にとまどっていた学生たちも、また筆者自身もだんだんとタイミング、「間」がとらえられるようになった。

以上のような方法で、複数の大学の規模の異なるいくつかのクラスで授業を行ない、最終回の授業で、このような授業方法についての意見・感想を学生に書いてもらったところ、おおむね好意的な反応が返ってきた。ところが、その中に次のような意見があった。「一方通行の講義ではなく、私たち自身に考えさせようとする意図はよくわかるのだが、自分の書いたことが果たして正しいのか、他の学生はどのように考えているのかわからないのがもどかしい」。なるほどと思った。受講生はテーマに関して自分の意見を「書く」ことにより、自分自身の思考を深めていくことになる。これは、知識を受動的に受け取ることとは異なり、学びの個別化につながる。しかし、同時に、「書く」ことは学びの共同化にもつながっていかねばならない。そのためにはさらに工夫が必要なことに気づかされたのである。その工夫はクラスの規模によって異なってくる。小人数のクラスならば、全員のレポートにコメントをつけて、次回の授業で返却したり、学生、教員が互いの顔が見えるように椅子を円形に並べて座り、テーマについて話し合ったりすることが可能である。しかしクラスの学生数が増えるにしたがって、教員が各学生のレポートにつけ得るコメントは短くならざるを得ないし、百名を越えるような多人数になると、毎回レポートにコメントをつけることも、また、全員で討論することも物理的に難しくなってくるであろう。そういう場合にはどうすればよいだろうか。

#### <多人数クラスでの工夫>

現在も講義形式で行なわれる授業が多い理由として、伝統的にこの方法が踏襲されているということの他に、多人数クラス、いわゆるマス・プロ型のクラスでも、マイクを用いれば、講義形式は可能であるということがある。本来は、できるだけ小さなクラス規模で対話的な授業を行なうのが理想的であるが、大学の経営的事情がそれを許さない場合が多い。全国規模で行なわれた調査をまとめた『教職課程科目教育原理の研究』における担当教員へのアンケート結果においても、「受講生と担当教員間の教育的関係を成立させるために、1クラスあたりの受講生を限定するべきだ」という意識がきわめて強く、具体的に受講生を50名以内にしたいたの考えに対して賛意を表明する者が大多数であった」が、「現状の限られた時間、施設の中で」それをどう実現していくかという点に触れた記述はみられなかった、とされている<sup>(5)</sup>。理想は理想として、現実には授業方法の開発、改善によって、受講生全員の顔も確認できないような多人数のクラスでも授業を成立させていかなければならないのである。前節で述べた授業方法は基本的に多人数の場合でも行なうことができる。ただし、教員の週あたりの持ちコマ数にもよるが、毎回、受講生全員のレポートに目

を通すことはかなりの仕事量になる。ただ、実際にやってみてわかったことであるが、レポートには受講生の個性があらわれていて興味深いし、同一テーマに関する各受講生のレポートの内容はある程度似かよってはいるものの、中には面白い考え方や展開をするものもあって、教員が柔軟に吸収しようとする構えさえもっていれば、レポートを読む作業は結構楽しいし、読むスピードもだんだんと早くなり、レポートの内容からいろいろ気づかされることも多い。問題は先ほど述べた受講生へのフィードバックであるが、各回に提出されるレポートの中から最大公約数なもの及びユニークな視点を持つもの等をいくつか選んでコピーし、次の回に受講生に配布する方法がある。こうして選んだレポートはファイルしておいて次の年度以降も同じテーマを取り上げる場合に「先輩たちの意見」として紹介することも可能である。また、プリントの分量やビデオの長さを考え、比較的短い時間でレポートが書けそうなどときには、書き終えたところに隣の人と交換して読み合う時間をつくるという方法もある。そして、半期ないし通年の最終回の授業では、毎回のテーマについて何点かずつ選んだレポートをコピーして冊子をつくっておいたものを配布し、授業全体の内容及び方法についての受講生の意見・感想を書いてもらう。授業終了後、プリント、ビデオの内容、分量について検討し、受講生の意見を参考にしながら見直し、手直しを繰り返して次年度の授業にのぞむということをしてきた。

以上のような授業方法は受講生にどのように受けとめられているのか。前述の「教育原理に関するアンケート」を、今年度（1996年度）前期に筆者が担当した3つの多人数のクラス（受講生数はそれぞれ146名、124名、107名）で、授業終了後に実施した。以下はその回答の中からの引用である。

- 教えられるだけでなく、自分から学び、考えないことには始まらないということがわかった。知識を蓄えることも大事だと思う。でも、いろんなことを感じて考えていく方が大人になったような気がする。
- 自分で考えるということがどれだけ大切で意味のあることかを思い知らされた。自分で何かやる気をおこさないと何もできないということが実感できた。
- 自分自身で考えることがすごく新鮮だった。自分のわかる範囲や、経験から、未熟ながら意見を出し、そしていっぱい考えた。授業が終っても、何か心に財産が残った気がする。
- 一方的に先生の考えを90分間聞いているより、ずっと面白い。たった90分なのに、朝からその90分で、七転八倒をすることもありました。それは私にとって話を聞いてノートをとるだけの講義よりずっと意義深かった。自分では、この授業にはとても積極的だったのではと思っています。
- 普通の講義は先生が言ったことをただノートに書いてテストにもその先生の考えをあたかも自分の考えのように書くだけの受身的なものだが、この授業は自分の

頭で考えていくので楽しかった。自分で感じ、考える機会が増えたことは自分自身を変えたと思う。

- 一方通行的な講義とは違い、プリントやビデオで与えられた課題に対してレポートで自分の考えを書くことにより、キャッチボールをしているようだった。
- 授業の最後の先生の話を書いて、また、配布されたクラスの他の人の意見を記したプリントを読んで、自分の考えをもう一度見つめ直すことができた。
- 他の人の意見を読んで、いろいろな考え方があるとおもしろかったし、参考になった。
- 授業が終わったあと、寮で、この授業を受けている同室の子と、昨年この授業を受けていた先輩と三人でいろんなことをしゃべりました。授業中もいろんなことを考えたけれど、授業が終わってから、一層考えることが多かった。自分がどういふふうで考えているか、言葉にすることで自分自身にも確認できた。
- 自分で考えたことはより身につくように感じた。今の教育は答を暗記するというのが多いから、発想に乏しく、自分の考えを確立することができないと思う。
- 教育というのは一方だけで成り立つものではなくて、おたがいの相互作用があってこそ成立するものだと思います。だから授業もそういう方向でいったら、もっと興味のもてるものになると思います。

本稿で示した方法はとりたてて斬新なものでも、手の込んだものでないが、上に取りあげなかった回答にも同様の意見が多く、従来の一般的な講義形式の方が良いとする意見は見受けられなかった。受講生たちはおおむね積極的に授業に参加し、毎回のテーマに取り組むことにより、主体的に考えることの大切さを実感し、さらには自分以外の人の考えに接することにより、複数の視点を持つことの重要性にも気づき始めたようである。

ところが、実はこのような授業方法は、教員自身にとってもメリットが大きい。授業に先立って、テーマをしばらくこんで可能な限り力を注いで教材を準備しておけば、学生は予想以上に積極的に「考える」ことに入っていく。取り組まなければならない作業があるため、私語も少ない。学生の書き上げたレポートにはひとりひとりの個性がよく表われていて、読んでいて楽しい。また一度自分で問題点を考えたテーマなので、授業の最後に教員が行なうコメント、示唆を学生は集中して聞き、さらに考えを深めようとする。自分の話すことに学生が真剣に耳を傾けるのは実際、心地良い。

この方法は以上のようなメリットをもつと思われるが、さらに、今後の課題として、次の2点をあげておきたい。

まず、受講生と教員との「キャッチボール」をさらにすすめていく方法上の工夫はないかという点である。少人数のクラスならば、各回のテーマについて直接対話することにより、また、中程度の人数ならば、受講生と教員との自由記述欄を設けた「出席カード」等



を用いることによって、毎回の授業について内容、方法についての受講生の意見・感想を教員は吸収し、授業の改善につなげていくことが可能である<sup>(6)</sup>。しかし、大人数のクラスではこれらの方法を用いることには限界がある。本稿で示した方法の場合でも、学生の作成するレポートの最後に、「今日の授業についての一言」を書いてもらい、次回の授業でそれに言及することなどができるが、より対話的な展開が可能となる方法が見出せれば、学生、教員双方にとって授業はさらに有意義なものとなるだろう。

第2に、これは大人数のクラスに限らないが、受講生どおしのコミュニケーションを授業の中でどのように形成し、活用していくかという点である。授業に出て単位を取得するためにたまたま一つの教室に集ってきた受講生が、ともに刺激を与え合い、学び合う関係をどう築いていくかという問題である。「教員⇄学生」の関係のみならず、「教員⇄学生」と「学生⇄学生」の両方の関係を考慮した方法上の工夫はないかということである。以上の2点を今後の課題としたい。

<おわりに>

大学で授業を担当するようになって以来、半期が終了するごとに授業に対する意見・感想を受講生に書いてもらってきた。また、授業の前後の休み時間にもできるだけ受講生たちいろいろな話をしようとしてきた。それらを通して気づいたことは、学生は教員の授業行動を常に冷静に鋭く観察しているということ、さらに、学生の意見から授業改善の貴重な糸口が見つけれられるということである。このような把握は、何ら「他人指向型」の発想でもなければ、学生への「迎合」でもない。学生と教員とがいかなる「場」として授業をつくっていくかという問題である。授業が成立するとはどういうことかと思悩まなくても、また、「多くの受講生に欠けていると思われるのは、授業に参加し授業を作ってゆこうとする基本的学習態度である」「おもしろみを感じずるまでにはある程度の勉強が前提とされる抽象的理論が敬遠されがちとなる」「担当教員への依存的態度が多い」（前記『教育原理の研究』、担当教員へのアンケート結果）<sup>(7)</sup>などと言って、授業が成立しにくくなった現状について、学生の側に責任を押しつけていても、とりあえず大学教員としてやっていくことはできるであろう。ただ、自ら現実に学ぼうとしない教員から、学生は学ぼうという気にならないだけである。また、実際問題として、「成績評価」「単位認定」の権限が教員にある以上、担当科目の授業について率直な批判を聞くことは難しい。いかに興味のもてない、自分にとっての「意味」を感じるこのできない授業でも、学生は単位を「もらう」ためには座って耐えている他はない。「教室では教師は王様である」などといわれる。単なる「王様」とどまらず、「裸の王様」になっているとすれば、これは笑えない喜劇である。確かに学生の「質」は変化してきているであろう。「指示待ち型」と学生の受動的態度や消

極性を嘆くのは容易なことである。しかし、そこに座っているのは、初等教育、中等教育の段階を経て様々な色づけを受けてきた元・生徒たちである。自分自身をみつめ、自分をとりまく様々なことらについて、多角的な視点から考えることの大変さと楽しさに気づかせること、「生徒」が能動的、自覚的に学びつつ生きる「学生」へと変わる契機を与えることこそ、まさに高等教育の任務と言うべきであろう。学生を、教員の話をしているだけの受動的な存在としてみるのではなく、ともに授業をつくり出す主体的存在として位置づける方法を創造していくことができるか否か。大学教育の活性化の成否はそこにかかっているとさえいえる。そのためにまずは具体的な事例の検討から始めなければならないだろう。「教育原理」の授業方法に関して、いまだ試行錯誤の域を出ない熟さない実践を報告した所以である。

[註]

- (1) マックス・ウェーバー『職業としての学問』、岩波文庫、21頁
- (2) このアンケートの実施に関し、本学の特別共同研究費の助成を受けた。
- (3) 牧昌見編『教職課程科目教育原理の研究』、132頁、133頁
- (4) 授業の方法、内容の全般について言えることであるが、ビデオの場合は教材とし得るソフトの現状からみて、同じ科目を担当する教員間の情報交換が特に重要となるであろう。
- (5) 『教職課程科目教育原理の研究』、128頁
- (6) 織田揮準「大福帳による授業改善の試み—大福帳効果の分析—」(『三重大学教育学部研究紀要』第42巻、教育科学(1991)、165頁
- (7) 『教職課程科目教育原理の研究』、128頁